

# PBL ガイドブックガイド

PBL の理解を深めるためのガイドブック・ハンドブックまとめ

平成 24 年度文部科学省教育改善・充実体制整備事業  
兵庫・大阪・和歌山「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実」  
テーマⅢ「領域・規模別産業界ニーズをふまえた教育手法・手段の開発」委員会  
PBL ガイドブックワーキンググループ

## 1. 本 PBL ガイドブックガイド作成の背景

本ガイドは平成 24 年度文部科学省産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業兵庫・大阪・和歌山「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実」テーマⅢ「領域・規模別産業界ニーズをふまえた教育手法・手段の開発」委員会の最終年度(26 年度)取組成果物の一つである。

当初は平成 24 年度から 26 年度まで実施された他の取組(IS・PBL 事例収集、IS・PBL 教職員研修、IS・PBL グランプリ・意見交換会、PBL モデルプログラム実施)を基に独自の PBL ガイドブックを作成する予定であった。しかし、委員会メンバーが調査したところ、すでに良質の PBL ガイドブックが多数存在することがわかり、むしろこれらのガイドブックを紹介する「PBL ガイドブックガイド」を作成した方が PBL に携わる教職員の役に立つのではないかと考え、本ガイドを作成するに至った。

また、本ガイドに加え、平成 26 年 8 月に実施した産学協働 PBL モデルプログラムで実際に使用した資料をまとめた資料集を作成し、本ガイド中でも紹介している。

## 2. 本ガイドの目的・内容・活用方法

本ガイドは、これから PBL に取り組む教職員が PBL を行うための参考文献・資料集の役割と、PBL の実施経験がある教職員が PBL の質をさらに高めるための参考文献・資料集の役割を果たすことを第一の目的としている。日本国内の大学が作成した非公開のガイドブック、日本語で執筆されもしくは日本語に翻訳されて出版されている PBL ガイドブック、英語で執筆された欧米の PBL ガイドブック等、PBL のノウハウを紹介している様々な形態の報告書・書籍を網羅するよう努めた。さらに、より深く PBL について考えたい教職員のために PBL のベースとなったと言われる古典的な文献についても紹介した。それぞれのガイドブックについては、題名、著者、入手方法、目次、詳細内容、書評/解説の情報を掲載している。

PBL を Problem-based learning(課題解決型学習)とするか Project-based learning(プロジェクト型学習)とするかは様々な議論があるが、本ガイドではどの PBL も両方の要素を多かれ少なかれ含んでいるものとし、詳しい分類はしていない。

PBL を実践したい教職員にとって使いやすきように、各ガイドブックに関してどういった点で自分の PBL に役立つかが一目でわかるように要点をまとめるよう心掛けた。また、PBL について歴史的な観点や学術的観点から詳しく知りたい教職員に対してもある程度役に立つような資料を含んでいる。

本ガイドがこれから新しく PBL の実施を考えている教職員やすでに PBL を実施している教職員の一助となれば幸いである。

### 3. PBL ガイドブック・ハンドブックリスト

汎用性のあるガイドブック・ハンドブック(出版されていない非公開のもの。各大学・組織に問い合わせの必要あり)					
No.	題名	著者・入手方法	目次	詳細内容	書評/解説
1	「O/OCF-PBL 2014 ファシリテーションガイドブック」	京都産業大学 PBL 研究会編、京都産業大学・コーオプ教育研究開発センター発行  <u>問合せ先</u> コーオプ教育研究開発センター 075-705-1754 (担当 富山・前原)	1. 京都産業大学における PBL 型授業とは、2. O/OCF-PBL2・3 ガイド、3. O/OCF-PBL1 ガイド、4. 参考	PBL とは、京都産業大学の O/OCF-PBL(On/Off Campus Fusion – Project Based Learning)とは、同大学における PBL 型授業の位置づけ、授業における教員の役割、コーチングとは、ファシリテーションとは、シラバス例、課題設定、課題提供者に伝えておくこと、月ごとの大まかな流れ、毎回の授業、合宿、最終報告会、受講生募集と審査基準、評価、アサーションとは等  <b>☆様々な場面で活用できる教材付</b>	京都産業大学における PBL 型授業の標準的な進め方や、授業で参考となる事項について解説している。「ファシリテーションとは」「ファシリテーションのための FAQ」等、ファシリテーションする上で参考になりそうなノウハウ・事例が紹介されている。さらに、 <u>授業の様々な活動(アクティブラーニングの練習、チームビルディング等)</u> で使える教材も多数掲載されている。
2	「PBL ハンドブック～学生主体の授業へのイントロダクション～」	長原礼宗 東京電機大学教育改善推進室 副室長編、東京電機大学教育改善推進室発行(2012)  <u>問合せ先</u> 東京電機大学 教育改善推進室 03-5284-5233	1. はじめに—PBL とは？、2. 能動的学習法の歴史、3. PBL 成功の秘訣、4. PBL の事例、5. さいごに	PBL の学習効果(学術的裏付けの紹介含む)、PBL の主な特徴、能動的学習法の歴史、PBL 成功のための重要なポイント、テーマ設定、授業方法、教員 TA の役割、環境、評価方法、PBL の事例(国内・海外)等	PBL の効果の理論的な裏付け、歴史、PBL 成功の秘訣、PBL の事例についてコンパクトにまとめたハンドブック。図や写真も多用しており、全 9 頁のハンドブックなので、 <u>PBL 初心者の教員がまず目を通すのにおすすめ。</u>
3	「自律的学習意欲を引き出す！ PBL Guidebook —PBL 導入の為	同志社大学 PBL 推進支援センター発行  <u>リンク</u>	1. PBL における学習支援、2. カリキュラム設計、3. PBL と社会連携、4. PBL における教育効果、5. PBL における評価、6. PBL の導入に向けて	プロジェクトを始める前に(教員、学外協力者説明会の開催、登録説明会の開催、プロジェクト説明会の開催)、プロジェクト開始(SA・TA 制度の活用、SNS 型学習支援シ	<u>教養教育における PBL で地域を巻き込んで大きな流れをつくっている同志社大学のガイドブック。</u> 同志社大学の PBL の定義、プログラム支援等についてまとめられている。また、同大

	の手引き」	<a href="http://ppsc.doshisha.ac.jp/">http://ppsc.doshisha.ac.jp/</a>  <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">問合せ先</div> PBL 推進支援センター 事務局  ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp 075-251-3064		ステムの活用、ブログ/大学 HP からの情報発信、貸出機材/資料/図書等の充実/教室スペースの確保、合同成果報告会/シンポジウムの開催、各種アンケートの実施)、プロジェクト後(成果報告書の作成、学生懇談会/SA・TA 懇談会/教員・学外協力者懇談会の開催)、教員の役割、職員の役割、他大学のカリキュラム設計の事例、教育効果の測定等	学の PBL 事例も紹介されている。PBL における教員と職員の役割、業務、資質についても具体的に述べられており、さらに教員と職員の連携の仕方についても説明がなされており、学ぶべきことが多い。
4	「三重大学版 Problem-based Learning 実践マニュアルー事例シナリオを用いた PBL の実践ー」	三重大学高等教育創造開発センター編/発行(2007)  <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">リンク</div> <a href="http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/pblmanual.pdf">http://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/pblmanual.pdf</a>	1. はじめに、2. 事例シナリオの作成法 3. 学習ガイドの作成法 4. PBL 授業の進め方、5. チューターの役割と務め方 6. 評価の方法	PBL の特徴、三重大学での PBL の形態、事例シナリオに求められる要件、PBL の類型、事例シナリオ作成の2つの過程、講義と PBL での教材開発過程の比較、事例シナリオ作成の4つステップ、事例シナリオから引き出される学習項目の確認、完成した事例シナリオ例、学習ガイドの役割、学習ガイドの標準的なフォーマット、PBL 授業のプロセス、PBL 授業を成功させるために、授業進行中の学生の学習支援、グループ学習を効果的なものとするためのチェックリスト、グループ活動中の働きかけの例、グループ学習の指導事例、ポートフォリオとは、ポートフォリオの構成例、ポートフォリオによる評価の留意点等	三重大学は、国内の大学の中では先駆的に PBL に取り組んでいる。医学部で始まった PBL が全学的に広がりを見せている。同大学はアメリカのデラウェア大学の PBL 研修を受け、そのノウハウを学んでおり、本書でも本来の欧米型 PBL(専門教育で行われる PBL)のノウハウを紹介している。様々な分野の専門教育で適用可能な一般的なノウハウが具体的に掲載されており、すぐにでも活用できそうである。「事例シナリオ」の作成方法、シラバスをより詳しくした「学習ガイド」の作成方法や「グループ学習への参加の意思表明を文書でしてもらう」等欧米型の PBL の具体的なノウハウが多数掲載されている。
5	「平成 26 年度産学協働 PBL モデルプログラム “Co-Creative Camp in	平成 24 年度文部科学省産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業「産官学地域協働による人	1. はじめに、2.実施概要、3.プログラムの実施スケジュール、4.事前準備、5.当日プログラムの流れ、6.プログラムのポイント、7.プログラム当日、8.資料集	テーマ設定、企業・団体の選定、事前学習、ファシリテーターの役割、チーム編成、ファシリテーター自己紹介、アイスブレイク・チェックイン、個人目標設定、アセスメント受検、レクチャーの方法・タイミング、テーマ	本資料集は、本ガイドブックガイドを作成した文科省の事業のテーマ III 委員会ワーキンググループが中心となって作成したものである。本ワーキンググループが中心となり、平成 26 年 8 月に二泊三日で行った、本事業参加 14 大学

	Summer“実践資料集”	材育成の環境整備と教育の改善・充実」テーマⅢ「領域・規模別産業界ニーズをふまえた教育手法・手段の開発」委員会編(2015)  <a href="#">リンク</a> <a href="#">リンクを張る</a>		発表の内容、チームビルディングの方法、振り返りの目的、リーダーミーティング、ファシリテーターミーティング、情報収集の方法、(企業への)質問内容、チームへの関わり方、(プレゼンに関する)講義の内容、(中間)プレゼンのフィードバック、相互フィードバックの準備とタイミング、リハーサルの目的、振り返りの目的と方法、評価・審査等  <b>★様々な場面で活用できる教材付</b>	<u>合同の産学協働 PBL モデルプログラムの準備と当日の流れ、そこで培ったノウハウ、そこで活用した教材を紹介している。産学連携 PBL を実践するための一連の流れと注意すべきポイントがわかるようになっており、教材も多数提供されているので、実践のための具体的なマニュアルになると考える。</u>
--	---------------	--	--	--	--

特定の専門分野の PBL のガイドブック・ハンドブック					
No.	題名	著者・入手方法	目次	詳細内容	書評/解説
6	「PBL (Project Based Learning) 型授業実施におけるノウハウ集 (2011 年 7 月改定案)」	先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム (2011)  <a href="#">リンク</a> <a href="http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/pblknowhow20110726.pdf">http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/pblknowhow20110726.pdf</a>	1. はじめに～PBL の重要性(今なぜ PBL か、本書のねらい)、2. PBL の実施に関する具体的なノウハウ(START:新規立ち上げ、PLAN:設計・開発、DO:実施、CHECK:評価、ACT:継続)、3. おわりに	今なぜ PBL か、PBL の実施における S-PDCA のサイクル、PBL 実施の決定と学内調整(反対意見への対応含む)、設計・開発体制、PBL ノウハウ活用体制の構築、カリキュラム内での位置づけ、実施体制、テーマの検討、教材の作製、カリキュラム、演習環境の準備、評価方法、担当教員の事前トレーニング、連携先との事前調整、受講者選抜の方法、チーム編成、教育・指導、進め方、発生事態(トラブル)対応、成果発表会、評価基準、PBL 事体のレビュー・改善、継続実施のためのポイント、学外との情報共有、成功に導くポイント等	本書は、IT 系の授業を PBL で行っている複数大学により、各大学で実施されている PBL のノウハウを共有し取りまとめたものである。PBL を実施するにあたり、学内調整の仕方等、情報系以外の分野でも参考になるノウハウが多数紹介されている。学内調整のポイントには、「研究を重視する教員からは、教育目的の PBL の意義が認められにくい。そのような場合には、PBL は研究能力の向上にも有効であることを伝えるとよい」とある。
7	「情報工学系 大学教員のための PBL 実践ガイド」	九州大学大学院システム情報科学府情報知能工学専攻社会情	はじめに、各章の構成とキーワード、第 1 章 九州大学における実践的 ICT 人材育成、第 2 章 PBL について、第 3 章 PBL	実践的 ICT 人材育成の背景、産官学の取り組み、九州大学の取り組みと QITO コースの設立、QITO コースの概要・理念、	情報工学系 PBL のガイドブック。国立大学法人九州大学大学院システム情報科学府 情報知能工学専攻 社会情報システム工学コース

	<p>—Project Based Learning」</p>	<p>報システム工学コー ス・高度 ICT 人材教育 開発センター(2012)</p> <p><a href="http://www.qito.kyushu-u.ac.jp/qito/wp-content/uploads/2013/06/pblguide.pdf">リンク http://www.qito.kyushu-u.ac.jp/qito/wp-content/uploads/2013/06/pblguide.pdf</a></p>	<p>カリキュラムのフレームワーク、第 4 章 基本 PBL、第 5 章 実践 PBL、第 6 章 インターンシップ</p>	<p>QITO コースのカリキュラム、PBL 実施の 5 フェーズ、指導体制の確立、役割(顧客役、技術指導役、Project Management Office 役、カリキュラム担当教員、支援スタッフ、フィジカル面とメンタルサポート役)、構成員(大学教員および常勤教員、テクニカルアシスタント、学外技術者、支援スタッフ)、教材の準備、ガイダンスの開催、技術指導、プロジェクトマネジメント指導、大学を休みがちになるケース、基本 PBL の内容、実践的インターンシップの概要等</p>	<p>(QITO コース)で実践されている PBL の実践経験から得られた詳細なノウハウと実践例が掲載されている。専門分野に特化した情報が<u>多いが、ロジカルシンキングについての記述などは他分野の教員にも参考になる。</u></p>
8	<p>『プロジェクト学習の基本と手法—課題解決力と論理的思考力が身につく』</p>	<p>鈴木 敏恵(2012)、教育出版</p>	<p>1章「意志ある学び」をかなえるために、2章 プロジェクト学習とポートフォリオの基本と機能、3章 実践への理論と手法—目標設定・知の再構築・総括的評価、4章 実践の手順とポイント—プロジェクト学習の基本フェーズ、5章 プロジェクト学習の実践事例と活用、6章 スタートするための基本フォーマット</p>	<p>コンピテンシーとは、プロジェクト学習の8つの特徴、プロジェクト学習の基本、ポートフォリオの機能、プロジェクト学習の目標(とテーマ)設定、「題材」の考え方と決め方、「目標」の考え方と決め方、「課題発見」から「目標設定」に至る方法、「目標」チェックリスト、「再構築」を指導する手順、「再構築」の制作・意図・価値、「再構築」の条件、プロジェクト学習の評価、「論理的思考力」と「課題解決力」を評価する、プロジェクト学習の流れ等</p> <p>★教材付</p>	<p>本書は、プロジェクト学習・ポートフォリオ評価・コーチング手法を実践的に行ってきたシンクタンク未来教育ビジョン代表鈴木氏の著作である。<u>様々な現場で「意志ある学び」に関わってこられた著者の経験に裏打ちされた情報が多数掲載されている。</u></p>
9	<p>『PBL( Problem-based Learning): 判断力を高める主体的学習』</p>	<p>ドナルド R.ウッズ(訳: 新道幸恵)(1994)、医学書院</p>	<p>はじめに、第 1 章 変化に対する準備ができていないか、第 2 章 問題にもとづいた学習(PBL)とは、第 3 章 問題解決のスキル、第 4 章 小グループの PBL、第 5 章 グループ・スキル、第 6 章 自己主導型・相互依存型・小グループによる PBL、第 7</p>	<p>変化のプロセスの段階、Perry の学習態度モデル、ストレスや時間・怒りの管理テクニック、学習の嗜好についての調査項目、目標設定・記録、PBL とはなにか、PBL の長所と短所、問題解決のスキル、チューターの役割、小グループの PBL、グループワー</p>	<p>本書は、PBL を初めて行っただけと言われているカナダのマックマスター大学の教員が執筆したものである。<u>多くの文献を引用し十分な理論に裏打ちされた PBL のノウハウを紹介しており非常に読み応えがある。</u>様々な評価シートや教材も掲載されている。様々な理論が紹介され</p>

			<p>章 自己主導型・相互依存型学習のスキル、第 8 章 自己主導型・相互依存型・小グループによる PBL の自己評価、第 9 章 自己評価のスキル、第 10 章 まとめ</p>	<p>クの長所と短所、グループ・スキルにおける問題、行動のガイドライン、フィードバックを通して成長するためのガイドライン、グループとチームの比較、自己主導型・独立型学習、自己主導型・相互依存型学習、学習の基礎を応用する、モニターのしかた、フィードバックの返ししかた、自己評価のスキル等 <b>★振り返り等のための教材付</b></p>	<p>ているので、初めて PBL を行う教員が読むと、少し情報量が多すぎると感じる可能性もあるが、すでに PBL を実施している教員が自らを振り返り、教育の質を上げるために参考になるポイントが多数紹介されている。</p>
10	『実践 PBL テュートリアルガイド』	吉田一郎・大西弘高 (2004)、南山堂	<p>1. PBL テュートリアルとは何か、2. なぜ PBL テュートリアル学習が必要か、3. 学習、教育と教育理論、心理学的基盤との接点:PBL の意義や活用法、4. 診断推論、臨床問題解決とは、5. どのような事例がよいのか、また事例はどのようにに仕組まれているか、6. PBL を取り入れた新しい医学教育カリキュラム、7. 学生の行動変容をきたす因子、8. 医学生は PBL テュートリアル学習のための情報をどのように集めるか、9. テュートリアルにおける自己学習、グループ学習とチューターの役割、10. PBL を阻む因子:具体例と対応、11. PBL と評価、学生評価、チューター評価、その他、Appendix: PBL に関するカリキュラム開発の方法</p>	<p>PBL テュートリアルとは、PBL テュートリアルの歴史、PBL テュートリアルプロセスチェックリスト、PBL テュートリアルの導入とカリキュラム、PBL テュートリアルの問題点と今後の課題、「関連付け」と学習効率、少人数グループ学習、能動学習、成人学習理論、PBL テュートリアルの必要性への反論、学習理論、ポートフォリオを用いた学習と評価、問題理解、問題解決、事例における「自然さ」「本物」の重要性、事例の内容・組立て、良い事例の条件、学習への動機づけを与える事例、問題組立用チェックリスト、カリキュラム改革、改革の成功の鍵、学習行動を引き起こす内的因子・外的因子、PBL テュートリアルの効果、図書の活用、リソースパーソン、チューターの役割、PBL テュートリアルがうまくいかない理由、グループダイナミクス、ブレインストーミングの考え方、PBL を阻む因子、PBL と評価等</p>	<p>PBL はカナダのマックマスター大学の医学部で始まったと言われているが、本書はその PBL の源流となる<u>医学系の PBL についてのガイドブック</u>である。医学系の PBL では、「患者の事例の中から問題を見つけだし、その問題をてがかりに、学習を進めてゆく学習」(本書頁 3より)を行う。<u>PBL の基本的な考え方、学習理論、教授法、カリキュラム改革の進め方等が紹介されているので、他分野の教員にとっても参考になるガイドブック</u>である。</p>
11	The Practice of Problem-Based	Amador, J. A., Miles, L., Peters, C. B.	<p>1. Why (We) Use PBL (Why We Switched, What is PBL?, Issues), 2.</p>	<p>なぜ PBL を使うのか、PBL とは何か、(PBL の)簡単な歴史、PBL でないものとは</p>	<p>PBL(Problem-Based Learning)について、様々な分野の授業事例を通して広く学べる良</p>

	Learning: A Guide to Implementing PBL in the College Classroom.	(2006).	Changing the Landscape (Changing Ourselves, Changing Our Courses, Changing Our Students), 3. No Problems? No problem (The Basics, Sources for Problems, Designing a Successful Problem), 4. Controlling Chaos in PBL: The Messy Middle (Conducting Class, Our Role, Student Contribution), 5. What Now? Evaluation, Revision, and Reflection (The Students, What Worked – and What Did't, The Sustainability of PBL)	何か、グループワーク、PBL に関する課題、中心を変える、スキルを磨く、PBL の範囲と期間、受講者数、教育目標、PBL の複雑度と優先順位づけ、グループ作り、評価と成績、PBL の基本、課題の情報源、成功する課題をデザインする(内容とコンセプト、ストーリー、今まさに起こっている課題等)、教員の役割、進捗管理、タスクから逸れない、進捗状況報告書、学生を信用した上で点検する、評価、グループの成果と個人の貢献、フィードバック、学生同士の評価、説明責任、PBL における個人の学び、ライティング、プレゼンテーション、試験、PBL の課題を評価する、課題の修正、課題のリサイクル、PBL の持続可能性	書。「グループワークは何人がベストか」「チームの決め方は」等の疑問にも具体的な答えが用意されて、教員がつまずきがちな多くのポイントについて様々な教授法やアドバイスが簡潔に説明されている。英語の PBL の本としては最初に読むのにおすすめの本である。日本での PBL は本来の PBL とは少し違う形で理解されることが多く、本来の欧米型の PBL を一から学びたい場合にもこの本は参考になる。
12	The Aalborg PBL model. Aalborg: Aalborg University Press.	Kolmos, A., Fink, F. K & Krogh L.(Eds.) (2004).	Introduction, Setting the scene, The Aalborg PBL Model – Diversity and Challenges, PBL in Distance Education and Work Based Learning, Skills Development and Supervision, Intercultural Perspectives (Part の目次のみ、それぞれの章の目次は長くなるので割愛)	Problem Based Learning と Project-Organized Learning のコンセプト、PBL の原則、オルボー大学の伝統的な PBL モデル、学生の声、方法、PBL は実践で何を意味するのか、プロジェクトと授業の構成と運営、理論と実践、グループワーク、グループ形成、試験、教員の役割、IT の役割、就職と PBL、分野別の課題設定について、課題の定義、異文化環境における PBL、目標の定義、外国語プログラムにおける PBL、建築デザインにおける PBL、建築教育における PBL、化学工学における PBL、半期の PBL 計画立案、遠隔教育における PBL と実践学習、修士課程と PBL 等	<u>デンマークのオルボー大学は創立当初の 1974 年から PBL を取り入れており、産業界の評価が高く、退学率も他大学より低いことで知られる。</u> 同大学では現在人文科学、社会科学、自然科学、工学の全てのプログラムにおいて PBL を活用している。近年は日本や他のアジア諸国でもオルボー大学の PBL を参考にする大学が増え、PBL の分野で注目されている大学の一つである。同大学は PBL の研修も提供している。本書ではそのオルボー大学の PBL に関わる教員達が様々な側面からオルボー PBL モデルを説明している。多くの教員が執筆しているため全体の統一性には少々欠けるが、 <u>オルボー大学の PBL に関する資料として</u>

					は一番情報量が多い資料である。
13	The Power of Problem-based Learning.	Duch B. J., Groh, S. E. & Allen, D. E. (2001). Stylus, VA: Stylus Publishing	Part One: Institutional Issues, Part Two: Planning for Effective Problem-based Instruction, Part III: Case Studies in PBL from Different Disciplines (Part の目次のみ、それぞれの章の目次は長くなるので割愛)	なぜ PBL か、PBL とは何か、PBL サイクル、デラウェア大学の PBL の歴史、PBL の事務サポート、管理職ポストにいる職員の役割、教員の役割と報酬、PBL の費用対効果、PBL の持続性、成果を記録する、学部のための PBL の様々なモデル、良い PBL の特徴、PBL 課題の書き方、グループ活用のための戦略、グループの作り方、グループの監督の仕方、グループアクティビティ、宿題、もめ事の対応の仕方、PBL の始め方、メンタリング、授業のゴールと学習目標、学部生ファシリテーターの活用、評価、3つのテクノロジーのC、学部別の事例等	本書は、1990 年代初頭から PBL に取り組み始め、現在ではその取り組みが世界中で知られているアメリカのデラウェア大学の教員が中心となり PBL について説明しているガイドである。Part I ではデラウェア大学の PBL がどのように発展したかを説明し、Part II では PBL についてのノウハウ、Part III では学問分野別の PBL の事例を紹介している。デラウェア大学は PBL の研修も提供しており、アメリカだけでなく世界中の大学が同大学の PBL の手法を学ぼうとしている。本書はそのデラウェア大学の取組やノウハウを知るために参考になる書である。

PBL についてより深く考えたい方のために(上記のガイドブック・ハンドブック等で取り上げられていた PBL のもととなる古典を数点以下で紹介する)

No.	題名	著者・入手方法	目次	詳細内容	書評/解説
14	How We Think.	John Dewey. (2007). Digireads.com Publishing.	1. What Is Thought?, 2. The Need for Training Thought, 3. Natural Resources in the Training of Thought, 4. School Conditions and the Training of Thought. 5. The Means and End of Mental Training: The Psychological and the Logical, 6. The Analysis of a Complete Act of Thought, 7. Systematic Inference: Induction and Deduction, 8. Judgment: The Interpretation of Facts, 9. Meaning: Or Conceptions and Understanding, 10. Concrete and Abstract Thinking, 11.	「考える」とはどのようなことか、4 種類の “Thought”(「考える」行為)、反省的思考の要素、思考の訓練の必要性、思考の価値、指南の重要性、継続的な規制が必要な状況、規制による推論から証拠への変換、好奇心、示唆、秩序だった思考、教授法と条件、他者の思考の癖の影響、それぞれの教科の特質の影響、現在の目標と理想の影響、「論理的である」とは、統制と自由、思考の全プロセスの分析、秩序だった推論—帰納法と演繹法—、判断—事実の解	PBL の理念の基となったと言われる教育哲学者 John Dewey(1859-1952)の書。How We Think「我々はどうに考えるか」について深い考察がなされている。彼によると「考える」という行為は4種類に分けられ、その中でも本書のテーマになっているのが“reflective thinking”(反省的思考)である。「“reflective thinking”とは何か」「どのように行うか」について様々な事例を紹介しながら説明されている。PBL もこの“reflective thinking”をさせることが大きな目的の一つであろう。少々読みにくい構

			Empirical and Scientific Thinking, 12. Activity and the Training of Thought, 13. Language and the Training of Thought, 14. Observation and Information in the Training of Mind, 15. The Recitation and the Training of Thought, 16. Some General Conclusions	<p>釈、意味—観念と理解、具体的・抽象的思考、実証的・科学的思考、実践と思考の訓練、言語と思考の訓練、思考の訓練における観察と情報、復習と思考の訓練</p>	<p>成ではあるが、PBL 担当教員も、学びの主体としての学生も、深く考えることはどういうことかを確認できる古典である。</p>
15	Democracy and Education	<p>John Dewey (1916), Dover Publications</p> <p>岩波文庫より『民主主義と教育(上・下)』という翻訳版も出版されている。</p>	<p>Ch. 1 Education as a Necessity of Life, Ch. 2 Education as a Social Function, Ch. 3 Education as Direction, Ch. 4 Education as Growth, Ch. 5 Preparation, Unfolding, and Formal Discipline, Ch. 6 Education as Conservative and Progressive, Ch. 7 The Democratic Conception in Education, Ch. 8 Aims in Education, Ch. 9 Natural Development and Social Efficiency as Aims, Ch. 10 Interest and Discipline, Ch. 11 Experience and Thinking, Ch. 12 Thinking in Education, Ch. 13 The Nature of Method, Ch. 14 The Nature of Subject Matter, Ch. 15 Play and Work in The Curriculum, Ch. 16 The Significance of Geography and History, Ch. 17 Science in the Course of Study, Ch. 18 Educational Values, Ch. 19 Labor and Leisure Ch. 20 Intellectual and Practical Studies, Ch. 21 Physical and Social Studies: Naturalism and Humanism, Ch. 22 The Individual and the World, Ch. 23 Vocational Aspects of Education, Ch. 24 Philosophy of Education, Ch. 25 Theories of Knowledge, Ch. 26</p>	<p>生活の必要性としての教育、社会的役割としての教育、方向を示すための教育、成長のための教育、準備としての教育、発達のための教育、特定の分野の能力を育てるための教育、思考を組み立てるための教育、要約し内省するための教育、再構築するための教育、教育における民主主義の概念、教育の目的、目的としての自然な発達と社会的効率、興味と規律、経験と思考、教育における思考、教授法の特長、主題の特長、カリキュラムにおける遊戯と作業、地理と歴史の重要性、教科課程における科学、教育的価値、労働と余暇、知的・実践的学習、個人と世界、教育の職業教育的側面、教育哲学、認識論、倫理学理論</p>	<p><u>PBL の教授法に影響を与えたといわれるアメリカの教育哲学者ジョン・デューイ (1859-1952) の代表的な書</u>。民主主義的な社会における教育の在り方について記している。子ども達の本来の興味関心に従った(一方で規律ある指導の下の)経験主義的な教育手法の発展を通し、民主主義社会を育てることが重要であるというのが主要なメッセージである。構成や文章は少々わかりにくい、<u>PBL に横たわる根本的な哲学を学びたい教員にとって</u>は一度目を通しておくべき古典である。</p>

			Theories of Morals		
16	The Tutorial Process.	Howard S. Barrows. (1988). Southern Illinois University School of Medicine.	Note, Background; The Tutor Functions at the Metacognitive Level; Additional Tutorial Tasks Requiring Focused Questions; Managing Interpersonal Dynamics, Another Tutorial Function; The Architecture of the Small Group Process; Review of the General Principles for Tutorial Teaching; The First Session for a New Group; Major Stages in the Small Group Tutorial Process; Should the Tutor be and Expert?; Large Group Tutoring; Appendices; References	メタ認知レベルのチューターの役割、特定の質問に基づいた追加的個別指導、グループワーク、教育的な診断・分析、課題の難度を調整する、人間関係力学を管理する、小グループ活動を組み立てる、モデリング、コーチング、個別指導の基礎・原則、新しいグループとの最初の授業、(グループでの学生の)役割と責任、グループ学習の主要な段階、学習目標、グループ学習に適用される認知プロセス、自主学習、チューターは専門家であるべきか、大きなグループの個別指導	<u>本書は、PBL や自主学習の主軸になる個別指導(Tutoring)の教授法について書かれたものである。</u> 講義中心の教授法に慣れている教員にとっては少し理解しにくいところがあるかもしれないが、ファシリテーションの方法の概念的基礎についてわかりやすく説明している。例えば、よく比較されるケースメソッドの教授法とどのように違うかなどについても説明している。 <u>短くて読みやすい古典的良書である。</u>